

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授受承認第三五二號
昭和二十五年十二月廿五日印刷
昭和二十六年一月一日發行

第十七卷 第一號

浄土

新年號

冬枯れの庭にをりて 吉田絃二郎

たゞ申す念佛生活 阿川貫達

一より出て一に還る 中野尅子

一枚起請文講讀 藤井實應

昭和廿六年元旦

謹賀新春

法然上人鑽仰會

目次

- 一枚起請文講讀……………藤井實應(5)
- 美しいおばあさんに……………高瀬磯(10)
- 年神の信仰……………中村康隆(16)
- 冬枯れの庭にをりて……………吉田絃二郎(1)
- 一より出て一に還る……………中野尅子(8)
- 修正會の話……………八百谷孝保(13)
- 七福神を訪ねて……………佐藤密雄(19)
- たゞ申す念佛生活……………阿川貫達(22)



冬枯れの夜にをりて

吉田 絃二郎

朝鮮の問題を中心にして世界は第三次大戦の悪夢におびえてをり、わたくしたち自身にしても明日のことを思ふては暗い心に囚へられてゐる昨日今日ではある。

しかし自然界を観てゐると、何も彼も十年前二十年前百年前のまゝである。そのおほどかな姿を見てゐると、落ちつきを失ひがちなわたくしたちに何か深いものを示唆してゐるやうは思はれる。

ことしは十二月の七日に多摩の田圃で初めて千鳥の群を見た。そして同じ八日に竹山ではじめて目白の聲を聴き目白の高鳴く音を楽しむことができるかと思ふと、寒い冬もありがたい。

釋尊のお悟りをひらかれたといふ臘八の日に竹山で今年をはじめての目白の聲を聴いたといふのも、わたくしにはうれしくもあり、ありがたくもあつた。

ちいといふ單調な目白の鳴き方であるが、時としては

鶯の聲にもまさつて深く心に迫るものがある。

故郷の山の樺の木や、落葉しつくした柿の木に鳴いてゐた六十年前の目白の鳴く音がよみがへつて来る。武蔵野の竹山の中に住んでゐる身にも、目白の聲を聴けば、六十年前の冬枯れの草山や美しい小川や水車小屋や眞つ紅な小粒のぐみの實がよみかへつて来る。

かういふ思ひ出に浸された刹那こそ、わたくしたちが童心に立ちかへる刹那であり、三昧に入ることのできる刹那である。

かういつた刹那をめぐまれるごとに慟哭して生きることとありがたさを感謝したい氣にもなり、死に度くないといふ氣にもなる。

英吉利の詩人ウォーズワースにもこんな言葉があつたやうに思ふ。かれは湖畔に住んでゐたので湖畔詩人と呼ばれたが、その湖畔の景色が餘り美しかつたために、神

のお召しがあつた時かれは心迷ふであらうと語つた。

わたくしは死ぬことはさして恐れてゐないつもりである。しかし自然のなつかしさを思ふ時、死ぬることは悲しい。

信州沓掛の落葉松の木立のなかにコツテチ風な古い建物がある。明治のころ亞米利加のグランド將軍が、日本を訪れた時、日光見物のをりの將軍の宿舎に宛てられたものを、沓掛に持つて來たものである。わたくしはその古びた建物の前に立つごとに、あの勇將グランド將軍が、自分の娘を結婚させ、新婚の旅に立たせた夜、愛娘の今は空しきベッドに顔を埋めて男泣きに泣いたといふ話を思ひ出すのであつた。

マアカス・オウレリアスの哲學者としての考へ方からすれば靜觀といふことが第一義であつた。喜怒哀樂生死離愁にも超然としてゐるのが哲人であつた。ところでその一人娘の死に直面した時、かれは狂へるごとく反轉懊惱し、慟哭した。

乃木さんが旅順に出かけて行つた時、乃木さんは東海道線の車中で「カツスケセンシ」の電報を受取つた。宇品で乗船するまでのわづかの時間を利用して乃木さんは

廣島に行き、或る寫眞屋に立ち寄り、勝典保典兄弟で寫つてゐる寫眞を片手に持つて、乃木さん自身の寫眞を撮つてゐる。乃木さんとしては父と子三人生きてゐる間に一枚の寫眞を撮つて置きたかつたのであらう。

話は前後するが、勝典少尉が高崎の聯隊から急に戦地へ出發することになつた時、乃木さんは、そのころはまだ田舎の驛のやうにさびれてゐた新宿驛に朝早くから出かけて行つた。終日來る列車來る列車を待ち、たうとう最後に夜遅く着いた列車に勝典を見出した。そしてふたゝび勝典を乗せた列車が新宿驛を發つて暗の中に消えて行つてからも最後までたゞ一人プラットフォームに立ちつくしてゐた。

夜旅順の攻圍軍司令官の部屋に、副官がはひつて來て保典少尉の戦死を報じた時、乃木さんは、ふツと、蠟燭の火を消してしまつた。

若いころは死といふ問題が自分たちから遠いへだたりを持つてゐるやうに考へられる結果、それほど恐ろしいものとも悲しいものとも思はれない。死を悲しいものとも思はれない。死を悲しむ老人を見ては可笑しいと感じることさへある。けれども自分自身老いの板を登りつめ

て來ると、死を恐れないといひながらも實際はさびしくてならない折もある。

俳諧寺一茶の辭世の句に

鹽から鹽にうつるちんぷんかん

といふがあり、小西來山に

來山は生まれた咎で死ぬるなり

それでうらみも何もかもなし

といふのがある。二つとも考へ方によつては悟りすました人の言葉のやうにも思はれるが、また考へ方によつては却つて生の執着の斷ちがたきものを感じさせる。一茶にしても來山にしても無理に死ぬことのさびしさを忘れようとしたのだとも思はれる。

この點、芭蕉翁の臨終に弟子たちが、辭世を問うた時「われに辭世の句なし。わが一生吐き棄てたる言々句々辭世ならざるはなし」といつた態度の方がずつと深い悟りを感じさせる。

今日の句は今日の辭世である。この心境までゆけば俳諧も宗教も一つになる。

この境まで行くことのできたところに芭蕉翁の俳諧の深みがあり、この境まで行くことのできなかつたところに、其角・嵐雪の句の浅さがある。

庭は冬枯れて靜かに眠つてゐる。しかしそこには涸れ涸れの小ひさな池をめぐつて鶴鴒や鴨やのじこが集まり二三日前の雨でわづかに湛へられた水を浴びてゐる。いかにも嬉々たる自然の姿である。

庭のそこゝには山茶花が咲きのこつてゐる。寒椿が咲き、わびすけが咲いてゐる。こゝにも嬉々たる自然の姿がある。

わたくしはこの二三日庭に下りてゐる。毎日庭を眺めてゐながらも庭に下りることは何ヶ月振りである。

わたくしは庭に下りて、そこに靜かに横たはつてゐる石を観る。或ひはしやがんで石と對座する。石は幾億萬年の沈黙はいかなる哲人の言葉よりもつよく人間の心に迫る。

わたくしは午後冬の日さしを浴びて石と對座するよろこびを感謝する。

わたくしは落葉し盡した冬枯れの梢を観る。北風にわなゝいてゐる梢にはすでに來るべき春にそなへて柔かな芽が準備されてある。生きとし生けるものゝ生きんとする意欲の強さを想ふては胸迫る思ひもする。

茶の繁みに鶯の笛鳴きが聞える。楓の枝にひたきが羽叩く笛鳴きもひたきの羽叩もわたくしの胸にひびく。

狭い庭ではあるが靜かに坐つてゐれば「われは人間よりも木を愛す」といつた哲人の言葉も思ひ出される。三昧の境地とはこんな心の世界であらう。

しかしわたくしの心は何となくさびしい。

このさびしさは何に依つて救はれるのであらうか。

「さびしさなくばうからまし」といつた西行法師の言葉は一つの救ひである。

冬枯れの庭はさびしい。冬枯れの庭のさびしさに耐へないわたくしは、たまたま東京に出て花やかな歌舞伎の客席に自分を見出したことがあつた。だがそこはもうわたくしの世界ではなかつた。わたくしは木立の中の家にかへつて來た。そこには冬枯れの庭と寂然たる故人の位牌がわたくしを待つてゐた。わたくしは救はれたやうな氣がした。

鶯は笹鳴き、ひたきは枯枝に羽叩きしてゐた。わたくしの心は安住の地を見出した。

わたくしは、何も理窟をいはないで合掌する人を尊敬する。

旅に行く毎に、その土地の川の石を拾つて來る若い人がある。愛すべき青年だ。

子供のころから陶器に夢中になつてゐた若い看護婦があつた。尊敬したい氣になる。

わたくしの一先輩はこのころ畑を作つてゐるが、地に這ひ出した蚯蚓を見るごとに、土をかぶせ、土の中に逃がしてやる。尊敬すべき人だ。

法然上人法語抄

有縁の人のためには身命財を捨てゝも、ひとへに淨土の法を説くべし。自らの往生のためには諸のちん塵をはなれて、専ら念佛の行を修すべし。

名號を聞くといふとも信ぜずば聞かざるがごとし。たとひ信ずといふとも唱へずば信ぜざるがごとし。たゞ常に念佛すべきなり。

わが心をしづめ、このさはりをのぞきて後念佛せよとはあらず。たゞつねに念佛してそのつみを滅すべし。

一枚起請文講讀(一)

藤井實應

もろこし我がてうにもろくの智者達のさたし申さるゝ觀念の念にも非ず、又學文をして念の心を悟りて申す念佛にも非ず

法然上人の主唱せらるゝ念佛は、もろこし(中國)や我朝(日本)に於て諸々の佛教先覺者たちが述べられたところの觀念の念佛や、又學問として念の心を悟つて申す念佛でもないであります。

念佛は法然上人以前から廣く行はれてゐました。天台宗に於ても眞言宗に於てもそれぞれ念佛を修してをりました。ところがその中國や、わが國で沙汰されてゐた念佛の多くは觀念の念佛でありました。精神を統一して、佛の法身を憶念したり、佛の相好を觀念したり、或は口で念佛を唱えるのであるが、それは或る悟りを聞く手段としての念佛であつたりしました。これらのむづかしい觀念の念佛ではないのであります。法然上人の常に仰せられたお詞の中

にも

「近ごろの行人よ、觀法をしなさるな、佛像を觀じたところが、運慶や康慶がつくつた佛像ほどにも觀することは出来ぬであろう。極樂の莊嚴を觀じて、櫻や梅や桃の華菓ほどにも觀じあらわすことはむづかしいであろう。たゞ阿彌陀佛は今現にましまして佛と成りたもうてゐる。そして念佛申す者を必ず我國に生れしめようと重ねての御誓ひがあるのだから、われわれが念佛を唱うれば必ず往生が出来ると善導大師も釋してをられるから、それを深く信じ、本願をたのみて一向に名號を稱ふるがよい」と仰せになつています。

また法然上人のすゝめたもう念佛は、學問をして念の心

を悟りて申す念佛でもありません、即ち念佛について、天台宗や眞言宗や法相宗に深遠な哲學的解釋がなされています。そのように念佛を學問的理論的に解釋してその念佛の心を解つて申す念佛でもないであります。

或人が法然上人に對つて「上人の申される御念佛は、念々ごとに佛の御心にかなうていでございませう」と申したので、「どういふわけで」と上人がかへし問はれると、その人が「上人は智者であられますから、名號の功德もくわしく知つてをられるし、本願のことも明らかに心得てをられるからです。」と申された時、上人は「汝、本願を信ずる

事はまだそんなことであつたのか、彌陀如來の本願の名號は、木こり、草かり、菜つみ、水くむたぐいの如きもの、内外ともに一文も知らぬものが、となうれば必ず生れると信じて、眞實に願いて常に念佛申すのが最上の人であるぞ。」と仰せられたのであります。かように上人のすゝめたもうた念佛は、觀念の念佛ではない、即ち無觀の念佛であり、また學問をして念の心をさとりて申す念佛でもない。即ち無解の念佛であります。古人もそれを無觀無解の念佛但信稱名（たゞ信じて御名をとる）が上人のすゝめたもう念佛であると申してをられます。

たゞ往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく

往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず

これが法然上人の創唱せられた念佛の中心眞髓であります。それは往生極樂を目當ての念佛でありますが、その肝心の往生極樂に就て、現代人は相當誤解をもつてゐるむきもありますから、先づその事について一言申上ります。

「往生」といへば、今日一般に死の意味に解され勝ちですが、それはいふまでもなく、あやまりです。往生に就ては彼の徳川幕末の有名な念佛行者徳本上人——御歳四歳から念佛を申しつけ、殊に一枚起請文を唯一無上の指導と仰がれて念佛を行ぜられた方——の『勸誠聞書』という書物

に

「必ず必ず死ぬるのぢやないぞよ。佛法は死ぬる法は教へはせぬ。死なぬ法を教へるのぢや。往生といふ字は、死ぬるといふ字に書きはせぬ、往き生るゝと書くぞよ。この通りに心得て、精出して念佛申さつしやるがよい。さつぱりと死ぬるのぢやないぞよ。極樂へ生れるのぢや。」

とありますが、實に巧にわかりやすく往生の眞義が説かれてをります。次に「極樂」も相當まちがえて考へられてゐるのではないでしょうか。善導大師は「極樂は無爲涅槃界

なり」と申されてゐますが、無爲涅槃といふのは常住眞實の世界です。煩ひのない平和なさとの境地とでも申すべきで、釋尊が佛に成られたそのお悟りの境地は涅槃であると説かれてあります。

われわれは此世に於て、盛になつたとか衰えたとか、或は成功した失敗した、勝つた負けた、ほめられたそしられた、損した得したなど、血眼になつて奔走しているのですが、おもえば、みなこれは滅びゆくことばかりであります。やがて死すべき身が滅びゆくことにのみ懸命になつていてどうなることでしょう。われわれ人間として生をうけた以上は、眞實にして滅びない世界を求めずには居られぬのであります。これをうるまでは人生としておちつきができません。即ち往生極樂の眞義はこの人間究竟の願ひである、常住にして眞實なる涅槃の世界即ち極樂に生れることであります。この世界に生きることこそが人生の歸趣であるべきであります。

極樂は涅槃界でありますが、それはまた阿彌陀佛の本願によつて成就された無量壽の無量光明土であります。阿彌陀佛は法藏菩薩と申されしに「もし我れ佛となりたらん時、十方の衆生、極樂に生れんとおもいて、南無阿彌陀佛と、もしは十聲、もしは一聲申さん衆生をむかえすば、ほとけにならじ」と本願をお立てになり、その本願成就して現に成佛し説法したまうてをられると經にも説かれてあります。念佛して極樂に往生できるとの阿彌陀佛の本願は、平等の慈悲に住しておこしたまへるものですから、

人をきらふことはありません。それゆえ、學問の有無を問はず、罪の輕重を論ぜず、善人も惡人も、老も幼も、男も女も、いかなる時代の人々も一切、だれでも念佛申すものは、十人は十人ながら皆極樂に生れることができるのであります。經にもあるように念佛申す者を阿彌陀佛は直ちに慈悲の光明に攝めとり、現身に於ては身も意もやわらかにし、よろこびを與へ、善心を生ぜしめ、當來必ず極樂に往生せしめ下さるのであります。この念佛によつて現在より未來永遠の救ひの道は開かれたのであります。念佛の信を護ることによつて此の世の事物も悉く意義あるものとなつてくるのであります。

かように心得て本文を拜讀するとよく分ることと思ひます。即ち、たゞ往生極樂のためには、南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて（心のすえ方、これが安心）申す（ひとすじのつとめ、これが起行）ばかりであります。そのほかに別の仔細はないわけであります。これと同じく、ろを法然上人は

「煩惱の厚き薄きをもかへりみず、罪業の重き輕きを沙汰せず、たゞ口に南無阿彌陀佛と唱へて、聲につきて決定往生の思ひをなすべし」とも仰せられ、又

「念佛申す程の人の往生せぬはなし」と、のたもうてをります。徳本上人は

只申せたゞたゞ申せたゞ申せ申す一つで往生はすると教えられました。（つゞく）

一より出でて一に還る

中 野 尅 子

信仰とはどう云うことか。宗教とはどう云う事か。念佛と云うのか、どう云う事を念佛と云うのか。何の爲めにお念佛するのか。お念佛をスルとどうなるのか——と云う事を、私は、何年念佛して居ても、お念佛する度に、新しく／＼考へ直し、反省し直してゐます。

信仰と云う事は、一番よく判つてゐて判らぬ事だ、いつもやつて居て、いつも本當にやつて居らぬ事が多い。恐らく、一番やつて居る事で一番本當にヤツテ居らぬ事は宗教ではないか知らん……。

第一、宗教と云う事は、佛様や神様を敬ふことだと思つてゐる、佛様や神様に仕へて神佛を大切にし、佛様や神様に氣に入るように、佛様や神様の方へしてやる事だと思つて居る。然しそんな事では無い。或はお念佛を申したりお經を讀んで、祖先や死んだ人々を追善するのだと思つて居る。而しそんな事でも無い。或は神様や佛様へ色々お願いやお頼みをして助けて貰うのだ、救つて貰うのだ、例へば

病氣や運が良くならして貰うことだと思つてゐる。而しそんな事でも無い。それでは修行や信心をして素晴らしい能力が現われたり、素晴らしい境致が開けて見佛や見神、奇瑞や靈感が得られ、神祕な靈能が發揮せられる事だとスル、それでもない。それも宗教の一部ではあろうが、そんな事が主ではない。そんな事は宗教的内容の熱達したお蔭で自然に伴う、附隨事項である。

それでは信仰といふ事はどう云う事か、宗教とは何かと云へば、常に環境の如何、事情の如何に不拘、自分をより良く、より正しく、より高く活かして行ける事だと思ふ。

譬へば、メダカは大きくなつても、鮎や鯉にはならぬ。鮎は大きくなつてもウナギにはならぬ。一生メダカはメダカで、鮎は鮎、金魚は金魚で煮ても焼いて喰つても貰へぬが、それだからと云うて、自分のみは一生虐げられてウダツが上らぬ、損だ！ 不幸だ！ 不運だ！ ときまつたものでは無い。大根や人參は、美しく美味しいが牛蒡だけは

色が黒くて、味も旨しくなく、不運兒だと限つた事でもない。隣りの畑で菜葉や法蓮草が生々と勢ひよく伸びているが、コチラでネギが青々と伸びる事も出来る。

又、バダや菊のみが美しいのではない。皆、三百六十五日づゝ努力して、夫々の時に夫々咲くのです。今咲けぬからとて、いつかは咲く。年に二遍三遍咲く花のみが褒められて、一度しか咲けぬ花は賞められぬとか云うのでも無い。隣りでダリヤやカンナが豪華に咲いているからとて、すぐ横でコスモスや河原撫子が風に吹き倒されて、いちらしくもパツチリ咲いて居るぢやありませんか。心ある人は野菊や野草を取つて、茶花にソツと一輪掛花にせられる。どれにも働きあり、どれにも輝きがある。

藤や卯ノ花が、櫻や桃におくれたと云うて悔やしがるが櫻や桃の無い初夏に、却つて時を得て榮え、幸福であるとも云へる。春の花には春の花の風情があり、秋の草には秋の草の趣きがある。何も秋の花や冬の花のみが冷過され、顧られて居らぬのではない。

春の花も、生ける天地の生命が「花」となつて咲いて居るのであり、秋のもみぢも天地の大生命が「もみぢ」となつて現はれてゐるのであるから、日本人は、春の花と同じように秋の紅葉をも賞美する。そこはいゝところですよ。それと同じように誕生を天地大生命の發現として、祝うように、臨終も天地大生命の活動として、歎美祝福していゝ、

そうせねばならぬのです。それを皆の人が自分の勝手な「感じ」から、コレは損だコレは不幸だ、アレは幸で、アレのみが得をして居ると羨む、實に馬鹿氣な話です。そうでは無くて、いつも天地の「大生命」は百パーセント自己を活かしに活かし、生き生き抜ける途が無限に賦えられてゐる譯だから、最適最好、最善最上に大生活を創造せねばならぬ。それが一番尊いのだし、それが「天地の心」でもあり、自分を最高價値に生かしたのです。コレが宗教です。

碁を打ち、將棋を指す場合に、一石く、一駒く、最善最高の局面へ打ち込んで行くように、私達は、時間的にも空間的にも、自己を一番意義あり、價値ある生かし方に使つて行けるようにならねばならぬ。ソレが社會法界への最大奉仕であり、又自己尊重であります。コレを宗教と云い、宗教的自覺の活動こそ、全世界、全法界を最高理想へ高めつゝあるのです。コレを眞の文化世界と云うのでせう。假令戦争をしていても、戦争の質が、文化的醒めに基くか、侵略的野獸性に基くかで大變な相異だと思ひます。文化的宗教性の戦いなら不動智の利劍であり、佛の「慈悲」神の「愛」によつて行はれる鐵拳であつて、打つ者、打たれる者、共に、此の一拳によつてよく目醒め、よく向上する大進化の象徴であります。常に此の「闘ひ」のために生き、此の「戦い」を続けねばならぬ。(廿一頁につづく)



美しいおばあさんに

高瀬 磯

昨年九月二十日ごろの東京朝日新聞の「天聲人語」——讀書は美容法の一つであること、を若い男女は心得ているだろうか「私の美容法」はクリームや白粉や口紅をぬつたりすることだけではない。よく眠り健康を保つことも美容法だが、本を読むことも内面的な美容法だ。三日讀んだら鏡をこらん、と手つとり早い話には參らぬが、何年かの讀書の習慣はおのずと言われぬ美しさを、その人の風姿に表わしてくるものだ。讀書といつても、本の善し惡しによりけりで、カストリ雜誌ばかり讀んでいては人相は醜くなるばかりだろう。それだけに書物の選び方、讀み方が大切だ。その意味でもジャーナリズムに書評が盛んになつたことはよいことで、良書がドン／＼讀まれ、日本民族も一段と品の良い男ふり・女ふりに人種改造されるだろう。同じ老人でも、男には人間の藝術品の様に深い美しさをたゞえた實にいい顔をした人が少くないのに、女が年をとると餘り見榮えのする人が少いのを不思議に思うことがある。これは日本でも外國でも人類共通の現象の様な氣がする。オバアさんでも何らかに於て第一流に達した人は、やはり同じ難い美しさを具えているが、一般的には女より男の方に内面的な絶えざるみがきを蓄積する人が多いからではないだろうか。」

これを「道元」誌十二月號が採りあげ——右の讀書のかわりに坐禪をもつてしてもソツクリその通りのことが言える——と附記してある。若し「淨土」誌が採りあげれば——念佛を以つてしても——と言わねばならないであろう。共に御尤もなことである。坐禪も念佛も道こそ異つても精神、行動の純化を目差して精進することに變りはなく絶えざる磨きを蓄積することにかわりはない。

さておぢいさんより、おばあさんの方が見榮えのする人が少い（この事は筆者も常に痛

「淨土」への感謝

田邊獅子藏

私が初めて淨土を讀ませていただいたのは昭和十五年かと思ひます。札幌へ轉勤になりました際、狸小路の本屋で求めましてから、毎月その本屋で買つておりましたが、會社が北一條西十五丁目にありますので、狸小路まで月の改まる毎に、淨土が未だ發行されぬかと、數回本屋へ出かける始末でした。十八年に本社に戻つてまいりましてからも引續いて愛讀し、六冊づつ合本して大切に保存し、閑暇の折、それやこれやをくり返して讀むのは何よりの楽しみでした。

昭和廿年の四月に戰災で無一物になり合本して淨土も、失つてしまひましたのは今も尙ほ残念でなりません。性來の痴鈍、讀ませて頂いて善いことを記憶し、それを實行にうつすなど、私には不可能事ですが、ただ讀んでいる間の氣持、それはたしかに淨土に導かれての嬉しさがあります。お蔭で私は私なりの

感じ、女性の爲めに嘆いている)として、宗教の立場から観ておばあさんの方が信仰心がないのであろうか。あばあさんのお寺まいり(お嫁さんに煙つたがられて體よく追い出されるのかも知れないが)は定石でおちいさんの何倍にあたるか正確なバーセンテージは判らぬが、質はとに角、數に於てはおばあさんの方がお寺まいりは多いらしい。それなのにあばあさんの方が見榮えがしない——とは不合理である。そこで、俗人の立場からどうして女は年を取るとみつともなくなるか——を少し検討してみよう。

「讀書は美容術ではないが美容院の出来ない魅力を創つて人に附ける——多讀によつて心を豊かにし、人生を鋭く觀察し、時世におくれず獨自のものの觀方が出来るようになった人の言葉は、聽手をして更に聽きたがらせると共に、その人への尊敬を増すものである」とは林悟堂の讀書を讀えた言葉である。

これにも全く同感である。一言に讀書と云つても讀む人の年齢、教養の差によつて吸収される部分や程度に相違はあつても、澤山の本をよむことは教養(自己教育)の一半として不可欠である。

次に、男の人は若い時分「只野凡兒」よろしくの甚だ風采の上らぬ人でも頭が光つてきて重役の椅子にでも納ると、不器量是不器量なりに貫目がついてどうやらえらそうに見えてくる。現實社會の中で散々もまれ苦勞してきた結果であらう。男は外部と常に接觸がはげしいので、いろいろの影響を受けて性格も複雑(角度が多く)になり幅も出てくるが、家庭にある女は交際範圍がせまいので男の人同様にはいかぬらしい。女は若いうちが「花」と云われてきたが、事實若いころちつとは見られた女の人も更年期と云う大きな肉體上の變化を境いに急に老けてしまふ人が多い。俗に云う色氣が失せたと云うか、うるおいのない、それこそ色も香も残らず外見ばかりか内面的には我執と物欲のとりこになり易い。そうかと云つてなまの色氣がそのまま残つて六十路近くにもなつて、紅白粉や派手な身なりに腐心している様も淺間しい。四十は四十なりに、五十は五十なりの地味な美しさは保つてゆきたいことである。

女の身にとつて更年期は洵に重大な轉換期で、子供達も成人してくれば本能的な感傷愛

心境をもつてゆけますのも「淨土」の賜物ですが、そうした氣持での新年の回想を一筆いたします。

元日の雨も親しく善諦想

昨年の元日は小雨が降り通しました。この句はコヂツケ句ですが、しかし雨の元日の氣持を明るく言ひ現わそうと、考へてのものなのです。一年の始めとあれば、誰しも晴天を期待するに違ひなく、雨を歓迎するものはあまりすまい。新しい一年を清く明るく暮したいという念願は百人が百人みな同じだとおもひます。そのお元日が雨降り、曇り空では、失望もし、不満も湧いた人もあつたでせう。私も若い時なら何かとお元日の豫定など賑やかに目論んで、雨に不平をもらしたに違ひありません。しかし永い年月を教えられ導かれたお蔭で、雨の元日を私は氣持よく受けとり迎へることが、私には出來ました。

すべて私たちの一舉一動が自分の考へから出て、自分の思ふように左右できるものと考へて歩いてゆく人は、それだけに豫想通りゆけば喜びもしませうが、反面に意に反すれば大きな不満が起り強い忿怒にさえ燃えること

から理性愛に切り換えねばならず、夫との間も肉體上のつながりから次第に遠去かり、人格の相互尊敬、生活上、事業の上の協力者として資格のない婦人は存在價值がなくなつてくる。更に欲を云えば、觀世音菩薩（男性的威嚴と、母性的な慈愛を現わした兩性具有の象徴）を理想として、人類愛、社會愛にまで愛情を擴げてゆきたいものである。併し、そこまで純化し、高めてゆくのは一朝一夕のことではなく、不斷の努力が一日／＼と蓄積され、陶冶され、鍊磨されて人格は圓熟してゆくのであつて、事々に油斷なく觀察し、咀しやくして本能、自我と闘い、自己批判心（反省、內的良心）と對他批判心（他愛心、外的良心）が調和され統一されてゆかねばならない。佛教的に云えば自己（本能、自我）を空しくし、自己を超え（超自我）た心理であらう。その意味で女性に最も希むことは視野を擴げ、何事によらず根氣よく強い意欲を持ち續けて貰ひ度いものである。

例を云えば、女の人は昔から芝居好きが當り前のようになつてゐるが、その好きな芝居にも視野は割に狭いようである。歌舞伎ファンは歌舞伎だけ、若い人は新劇のファンで歌舞伎や文樂はちつとも面白くない——と云うのが普通なのではないだろうか。古典の味も解せず新しいものも觀ようとはせず、ほんの自分達の育つてきた時代だけのものしか解らない人が多いのではないかと思う。これは演劇ばかりでなく文學、に就いても同様であらう。觀るもの、聴くもの、觸れるものの凡てを肥料として美しい情操の花を豊富に咲かせて貰ひたいものである。

戦後の社會の暗い面の一つである老人と若い人との不和や同居を嫌やがられるのもその大多數がおばあさんであるらしい。なぜ若い者に嫌らわれるか——に就いて老人に猛反省を促したい。子や孫にとつて徳の高いおぢいさん、おばあさんが長命であつたらどんなに我が家の誇りとし、大切に孝養を盡したいことであらう。他人であつても高德の老人を見ることは、見る者をしてほの／＼とした温かさを覺え老醜への嫌惡や不安もふき飛んでしまふ。いかにも命長ければ「徳高し」で自他共に幸福である。「命長ければ恥多し」であつてはならない。

でせう。けれどそうした、喜び、悲しみ、怒りに考えてみれば奔浪されている様な姿、それはただ小さな自分というものだけから、ものを考えているからで、そこに兎角間違ひのあつたことが、最近漸く諒解されるようになりました。本當に有難いことだと感謝しています。自分の一舉一動、いや一呼吸までが、あげてみ佛のお恵みであり、佛の御導きで動靜しているであります。そのように思ひ及べば不幸も不満も怒りもありません。佛のお恵み、佛の御導きは必ずしも、小さな自分に都合のよいようにばかり進展するものではありません。むしろ顧みれば希望の満されぬこと、不如意なことが大部分ですが、昨今漸く自分を顧みて、これが佛の御指命である。謹んでおうけせねばならぬと反省され、そこに不満も怒りの氣持も消え、却つて湧き起つてくるものは、お念佛であります。

元日の雨は、つまらないといえはつまらないが、これまた佛の御支配であると思えば、雨の日はまたそれなりに心身朗然として送ることが出来ます。こうしたところに人生の秘訣があると思つて右の句を作りました。

話の會正修

保孝谷百八

春たつといふばかりにや門松のやねもかすみてけさは見ゆらむ

無常は時をえらばす南無阿彌陀

佛。門にたつ松壽千年、ついに

かぎりありと晨朝の鐘鼓をうち

ならし、妄想不埒の夢をさまし

あくれば元日の禮者をまち、雜

煮すいもの盃のこしらへ、まづ

如來佛壇の鏡もち、開山祖師の

もちかざり、法施の念佛、おの

づから國家萬戶の祈禱となりて

云々…… 洛東 白銀居士

寺の正月は修正會から始まる。

正月に修する法會の謂をもつて修

正といひ、古來各寺々にて行はれ

し行事、天下泰平、國土安穩、萬

民豐樂のための祝禱である。

その源をたづねれば、二つの流

れのあることをあげねばならぬ。

一つは天平勝寶四年より東大寺に

て行はれたと傳へられる修二會で

あり、他の一つは神護景雲元年よ

り宮中大極殿並びに諸國の國分寺にて修せられたと傳へられる「吉祥天女悔過之法」である。この中大極殿のものは翌年より御齋會として後世永く繼續せられ、國分寺のものは間も無く寶龜二年には停止せられてゐる。

修二會は天竺の正月が中國の二月に當ると云ふ考へから、わが國に於いては天竺に模して歲首の法會を二月に修し、かく名付けられたものであり、東大寺にては爾來今日に至るまで、大法會として二月一日より二七日の間十一面觀音悔過の法を修して、天下泰平、玉體安穩を祈禱してゐるのである。この意味に於いて、修二會を修する寺も漸次多きを加へ、法隆寺、藥師寺、興福寺、饑法院、蓮華藏院、延曆寺、最勝四天王院、寶莊嚴院等その他が行つてゐる。

吉祥天女悔過の法は稱徳天皇の勅により、正月八日より七日間に亘り、畿内七道諸國の國分寺に於いて、この法を行はしめ、その功德によつて、天下泰平、風雨時に順ひ、五穀成熟し、兆民快樂ならんことを願つてゐるのである。此の法のもとづくところは云ふ迄もなく護國の經典として中國朝鮮共に信仰せられてゐる「金光明最勝王經」である。その大吉祥天女品にはこの經を聽くものは吉祥天女の威神力によつて、家・聚落・城市・都邑皆いさゝかの缺乏もなく通貨・黄金・財寶・穀物・一切の調度品は豊富であつて、庶民は安樂に住することが出來ると説かれてゐる。金光明經は全體を通じて怨敵退散・國家安泰・福祉増進が説かれ、國家佛教の中心をなした經典なのである。したがつてこの經による正月始めの法會が朝廷を初め、諸國にて修せられるのも謂れないことではない。宮中大極殿

にて正月八日より七日間、金光明經の講經により御齊會が修せられたのもこれにもとづくものである。

かくの如く吉祥悔過法と修二會とは同様の目的をもちながら、正月は國家としての立場から、二月は各寺院の立場から、時期を異にして同種の法會が行はれてゐたのである。しかるところ二月を歳首と考ふことの不自然さのためからか、各寺院も平安中頃より修二會に對し修正會なる呼稱にて、大體御齊會と同時期なる正月八日より七日間に亘つて行はれる様になり、法隆寺、藥師寺等、寺に依つては修正會と修二會を二つながら執行してゐるところもあるのである。

又修正會は一寺中にても堂毎に日を替へて行つてゐるものもあり「師光年中行事」によると

法成寺 十齊堂修正會 一日

阿彌陀堂 四日(治安元年始行一日—七日)

藥師堂 六日

金 堂 八日—十四日(治安三年始行)

法勝寺阿彌陀堂 六日(承暦二年始行八日)

金 堂 八日—十四日

尊勝寺阿彌陀堂 六日(嘉承元年始行)

金 堂 八日—十四日(康和五年始行)

圓宗寺金 堂 八日—十四日(延久三年始行)

最勝寺金 堂 八日—十四日(元永二年始行)

成勝寺金 堂 八日—十四日(保延六年始行)

延勝寺金 堂 八日—十四日(久安六年始行)

圓勝寺 十一日(大治四年始行)

蓮華王院 十八日(仁安元年始行二十二日)

と傳へられてゐる。

修二會が法隆寺・藥師寺・東大寺等の如き特殊なる寺院にのみ存續せられてゐるのに反し、修正會は全國一般的に行はれる様になり現在には各宗ともに元日の行事とされてゐるのである。

修正會中の白眉は何と云つても法隆寺金堂で八日より七日間に亘つて行はれるものである。本會はもと講堂にて修せられた様であるが承暦二年より金堂に移つたもので、その行法は吉祥天女悔過の法であるところから、吉祥御願、吉祥悔過御行とも呼ばれ、他の諸大會とともに勅會の一として數へられてゐる。

この吉祥悔過は所謂六時の行法で、七日夕刻より聖靈院に參集し通夜の作法をなし、八日夜半金堂にて開白より六時の行法に入る。往昔より口傳せられ來つた大らかなる聲明の諧調は森嚴なる推古の殿堂に、堂僧等の至心の祈請を彌増し、人々を異様なる迫力を以て魅了せずには置かないものであり、事實勇壯活潑なる一種豪壯なる法會である。

修正會の行法としては前述の吉祥悔過の外に藥師悔過・十一面觀音悔過及び法華八講其の他があるが、現在、一般各宗寺院に行はれるものは各様まち／＼で定まらない。しかし行法の目的は皆一樣である。

最後に修正會に附隨した行事にて興味あるものとして追離をあげ

よう。元來追儼は年中の疫氣を追拂ふ意圖にて、大晦日(又は節分)に行はれるのが普通である。しかし歳末に行はるべき行事が歳首の行事と共に行はれるのは一面矛盾せる如くであるが、災厄を拂ふと幸福を願ふは消極面と積極面であつて、究極は變らないから差支へはなからう。尾張名所圖會には熱田神宮寺大薬師の修正會(正月五日)に、俗に鬼まつりと云つて鬼を追ふの行事あることを傳へ、東都歳時記には淺草寺の修正會(除夜より正月六日まで)も亦、毎夕追儼の行はれしことを傳へてゐる。

これら神宮寺・淺草寺の修正會形式の根源と見られるものは法隆寺西圓堂及び薬師寺の修二會に行はれる鬼追ひの行事であらう。西圓堂のものは古い歴史をもち、弘長二年頃より始められたものゝ如くである。

西圓堂修二會は二月一日より三日間勸會として鎮護國家五穀成就を祈願する法要で、薬師悔過の行法により修せられる。三日目結願法要後、引き續き追儼の儀式が行はれる。この儀式は大導師先づ禮盤に登つて中札を取り、大衆も和して五大願を唱へ、畢つて鐘を打ち、堂衆の行動に對し狼藉する鬼を加持杖、牛玉杖にて追拂ひつゝ作法する。堂内の鐘太鼓の亂打とともに荒れ狂ふ黒、青、赤の三鬼と毘沙門天とが、それ〴〵鎌倉期の古面を被り、古式の装束よろしく、羅生門より松明手にもち堂外壇上の北正面に現れる。

先づ黒鬼(父鬼)面に三つの角あり〴〵斧を擔いで寶印をいたゞき、斧を研ぐの所作を演じて後、沙主役(山内中綱位の役人)より松明を受取り、之を三度振翳して雜踏する群衆中へ投げ捨てる。

次いで青鬼(母鬼)鐵棒を持ち威勢よく振りかざす動作の後、黒鬼同様松明を三度打ち振り觀衆の中へ投げ入れ、順次東正面より南正面西正面へと進むのである。それにつゞく赤鬼(子鬼)一面に小さい角あり〴〵劍を持ち、親鬼と同じく勇ましき動作の後、同じく群衆の眞唯中へ松明を投げ飛ばして行く。その後方より人氣者の毘沙門天が鉾を持ち、追拂ふ身振おかしく追廻るのである。

斯様に堂を廻ること三回にして此の儀式は終るのであるが、各正面に於ける三鬼の投げる松明が參詣の大衆の頭上へ火の粉となつて落ちる様や、堂宇を取りかこむこれらの群衆が口々に鬼の所作に對して、狂聲怒號を浴びせる光景は、暗夜次第に更け行くにつれ神秘であり、グロであり、その壯觀筆舌に絶するものがある。(この項佐伯啓造編「大和古寺行事」による)

在々國々の道場、大小共に法式をまもり、平等施一切、同發菩提心、往生安樂國を期す。十念の經釋ことに勝れさせ給ふ事、言語におよばず、紫雲の來迎をまち、伎樂の音聲をねがふばかりにして、まづは正月の目出たきをとほふ事、命は無量壽佛、たのしみは極樂世界、こんど〴〵るりの台に登るみち、はや現世よりたのもしき正月。(正月揃)

× × × × × × × × × ×

× × × × × × × × × ×

年神の信仰

中村 康 隆

正月行事の内で、尤も身近な門松と正月餅についてはかつて本誌（十五の一）にも詳述されたが、門松は本來神の來臨を招く標（しるし）の木でありよりましの木即ち神の憑代（よりしろ）であつて、餅は即ちその神への供物（おそなえ）で、この餅を食うことは神との共食（相餐）を意味しそれによつて神の恵みに與ろうとするものであるといわれる。家々に飾る年棚はつまりは正月に來臨する神を祀る祭壇であり、注連繩は神聖にして犯すべからざる場所の標示であるから、この時許りは如何なる賤が伏屋も神の在わす宮居ならざるはない譯である。「毛吹草」に「年徳（としとく）のみやしるならぬ宿もなし」とある通りである。

かように正月は來臨する神を迎えての祝祭であるが、それではど

んな神が來臨するのかといえ、これには説があるのである。

一體、正月に神祭を催すのは神寵による一年の幸の恵を希うに外ならない。しかるに新玉の幸を齎らす神はきつと幸せよき方角から來訪するに違いないと考えるようになった爲、此の神をその年の恵方（えほう）を司る歳德神（としとくじん）と解する陰陽家（おんにようけ）の思想に基く解釋が廣く用いられている。恵方とは干支（えと）を陰陽と方角とに配分して、十干のうち甲丙戊庚壬（え）を陽、乙丁己辛癸（と）を陰とし、十二支の子を北に午を南に卯を東に酉を西にして子丑寅の順に方角を十二分して之を充てはめ、その年の吉兆の方角について甲己の年は寅卯の間で北東東、乙庚の年は申酉の間で南西西、丙辛の年は巳午の間で東南南、丁壬の年は亥子の間で西北北、戊癸の年は己午の間で東南南が陽にして德の生ずる方角として夫々の年の吉の方角即ち明きの方、あきのかた或は恵方（兄方・吉方・元方・得方とも記す）と呼び、その歳の德を司る歳德神は、八將神の母で牛頭天王の妻とされる婆利賽女（はりさいじよ）ということ、常にその年の恵方に在わす神と見られている。従つてこうした恵方の考え方が受け容れられるようになる、元來は先ず氏神と菩提寺へお詣りする習いであつた元朝の初詣も、その年の恵方、例えば辛卯の年ならば東南南の方角に存する神社佛閣に參詣してその年の恩寵を仰ぎ祈るといつた恵方詣の習俗を生じたのも無理からぬ轉化と言えよう。方角の吉凶に關する陰陽家流の信仰は遠く平安朝に行われ、公方堂上の人が他行する場合その日によつて方角の善惡を云々するため行先が凶の場合には先に善き方に赴い

てそこから更に用向の場所にと向つたもので、これを方違（かたたがい）と稱した。三代實錄貞觀七年八月の條に清和天皇の方違された記事があるが、源氏物語などの平安朝の文學や日記類にも盛に記されている所である。そうした風があつたので、恵方詣もその源は平安朝にあつたと見ることが出来る。御堂關白記の長和四年正月九日の條に「雲林院に詣ず、是れ吉方なり」などとあるのも方角の吉凶信仰を物語るものではあるが後の恵方詣の原因をなすものといえよう。江戸時代になると此の恵方詣は一層盛んになり、屋内にも恵方棚・歳徳棚と稱して年棚を恵方に向けて、時には鴨居に筋かいにしてよもつるすようにもなつた。十返舎一九の「正月はもう神田まで來にけらし筋かいにつる歳徳の棚」という狂歌もこうした風を詠みこんだものであつた。「ゆがむのも嘉例なりけり恵方棚」（三巴）なのである。

このような陰陽家流の解釋が固有のものでないことは明かである。それでは「お正月」「正月様」は果してどんな神かというところ、通常年神とも年の神という所から、トシは穀物殊に稻なのでトシ神は穀神だとの解釋もある。本居翁はトシは即ち田寄の轉で田になつた穀物だという。延喜式の新年祭の祝詞でも稻を指して奥津御年と呼びこれを御歳神（ミトシノカミ）に奉つてゐる。一體、記紀等に見える穀神の名稱には大別してウケ系とトシ系とがある。ウケ系は宇加之御魂（倉稻魂、ウカノミタマ）、保食（ウケモチ）、豐宇氣比賣（トヨウケビメ）豐受大神、トユケオウガミとも、他に屋船豐宇氣

姫、豐宇迦能賣、若宇加能賣の類稱の神も存する）、大宜都比賣（大氣津比賣、オウゲツヒメ）などで女神とされる。ウカ、ウケ、ケは同じ言葉で食物の意味である。トシ系は大年（大歳）、御年（御歳）で、後者は前者の子ともされ、共に男神である。ウケ系は廣く食物トシ系は狭く穀物を司るとも見得るが、これらは神格の分化を意味するよりも寧ろ異なる傳承の統合を物語ると思う。かように日本上代の穀神信仰には異なる傳承系統が見られるが、兎に角この穀神殊に延喜式の御歳神といつた穀神崇拜が年頭の年神祭りとなつたのであらうといふのである。延喜式神名帳に見える駿河國安倍郡の大歳御祖神社は今では静岡市淺間社の相殿の一であるが、これを俗に歳徳神と同一視しているのも一應肯けることである。

しかし民間習俗として祭られる年初めの訪れ神は、こんな特別な社に祭られるような特殊神ではなさそうである。穀神として農村などで廣く信じられてゐるのは、神格のもつと不分明な田の神、農神、作の神などと呼ばれる農耕の守り神である。そしてそれは同時にまた山の神でもあつた。山の神が春山から降つて田の神となり秋の終りに田から上つて又山の神となるのである。此の神が農耕の年度變りに新しい年の稔りの幸を希う農耕社會の家々に先ずもつて請じられて祭られることはあり得ることであるが、しかしそれは山の神としてでも田の神としてでもなく、そこでは年の神として迎えられている。こうした自由な變格は山の神・田の神・年の神の姿の奥に是等の何れにも變轉自在な別個の神格が推測されてよいのではなから

うか。

こうした立場から考えると、最近柳田國男先生が「先祖の話」の中で、暮の靈祭や佛正月などの風習から、その本來の姿が實に先祖であつたと考證されているのは興が深い。一體、曆は日讀みということ、それも専ら月の盈缺によつて觀察された古代にあつては、一日は夕方より翌日の日暮までであり、一月も印度曆の様に満月より満月に至る間の方が朔より晦に至るものより古い型だつたと想われる。少くとも望の夜（十五夜）望の日（十六日）に最も大切な祭が営まれたことは想像に難くない。印度では正五九の月が三長齋月とされて寒熱雨の三季節の區切を示す月であつたが、支那では尤も古くは十月から新しい米穀年度に入り多と夏との二季交代であつたのが曆が改訂されて新しく農耕年度を一年とするようになり正月七月が春秋の移り變る最も大きな調りとされるようになったものらしい。そこで正月の祭も寧ろ七月のお盆のように正月満月の日に催されたのが古い形なのであらう。

所が、關西では正月十五日の晩を神の年越とも佛の年越ともいい翌十六日を佛の正月と呼んで、先祖棚へ雑煮を供えたり初墓参したりしている。十六日は俗に閻魔様の縁日といわれ地獄の釜の蓋が開くとか亡者も骨休みする日だとして徹底的に遊ぶ日であるが、本來は關東方面でいう様に御齋日・大齋日であつたので「齋日を鶯に似よ人の舌」の句もあるように忌むべき日として一切の仕事を休んだものである。「敷入や序に古き墓参り」「敷入に言われて拜む持佛哉。」敷入も單なる休日として遊ぶためではなかつたので、本來は先祖の靈を祭る大切な齋日であつた。備後の比婆郡では此の日佛様に黄粉餅を、因幡の氣高郡では雑煮を供え、佐渡では佛参りとして親類の佛

壇詣りをし、大隅の徳之島では先祖正月といつて墓の前で酒盛をしたが是は沖縄のジュールグニチー（十六日）の風習と同じである。

越後東蒲原郡では此の日のことを後生始めといふ、因幡八頭郡では念佛始めとも念佛の口明けともいふ、淡路では眞言始めとしているのも先祖祭の日であつたことをよく示しているよう。それが朔から晦を一月とするような陰曆が傳つた爲か却つて暮に靈祭をする風も見られた。徒然草に「つごもりの夜……亡き人の來る夜とて魂祭るわざは此頃都には無きを東の方には猶することにて」とあるが、今も年棚や佛壇にオミタマとか御靈の飯といつて握飯にしたり折敷や木鉢にうづ高く盛つたりして三ヶ日若くは七草迄供える所は多いのである。これを青森や津輕で小正月の晩の行事とする家のあるのは寧ろ古い慣りと想われる。年神祭が先祖祭だつたことが忘れられると佐渡の墓場念佛の習のように更に早く十二月十三日の正月始め行事として三十三所又は五十所の堂詣りをするようにさえ變つてゐるが、それも正月が元來盆と同様先祖祭だつたことを示す名残といえよう。そしてそれは小正月の小豆粥が延喜式を見ると小豆・さゞげ・黍・粟みのごめ・ところいも・米の七種粥であつたり、ドンド焼に子供が鳥追唄を歌つたり、七草嚙子が實はこの鳥追唄だつたのや、小正月に甲信越以東で薺玉や稻の花・稻の穂・粟穂・稗穂などと呼ぶ飾木を飾り物作りとて農具の雛形をぶらさげ略式には物作りの札を貼つたりするのとの一連して古い正月が新しい農耕の開始に際して先づ先祖を祭つてその御加護による豐作を祈つたものだつたことを知るのである。

「年立つや彌陀稱讚の誦經より」、寧ろこゝにこそ眞の正月祭があつたのである。

夷と大黒

七福神を訪ねる

佐藤 密雄

民主日本のお正月は、年々新しくなる様であるが、然し門松が立ち並び、メ飾りが張られた景色を見ると、「神代の昔も偲ばるゝ」と言ふ氣分に捉へられ、自分達の育つて來た國が、古い歴史の上にあることを床しいものとしてなつかしむのである。七福神も亦こうした正月の景物の一つである。七福神に選ばれた神々の夫々の歴史由來はもつと古いのであるが、七神を一隊に編成したのは室町時代の頃だと思はれる。室町時代でもアメリカ建國前だから相當に古いと言はねばなるまい。

七福神の出來たのは、室町時代の貴族知識人の趣味に應じてお茶やお能が行はれるに至つたのに對して、大衆の好みと欲求に應じて編成されたものと考へられる。七福神とは、夷・大黒・辨天・毘沙門天・福祿壽・壽老人・布袋の七人で、此の中で神らしいのは初めの四神で、後の三人は仙人や和尚で福を與えるよりは笑ひを與える程度の人間と見られる。此の中、夷は日本神、大黒は日本神兼印度

々の集ひである。實際に、此の七福神の會合を畫いたものを見ても神嚴莊重なものがなく、如何にも楽しさうに畫かれたものばかりである。夷と大黒は髯を挽き合ふか盃を引張り合つて居るし、布袋は便々の腹に杏花酒を満して夷と頸引きするか、然らずんば大黒と博奕をして居る。

又七福神の演藝會や酒宴は昔から繪草紙が傳へる所であるが、威嚴のあるべき毘沙門様もおごそかな顔付きをする場面がなく、又美人の辨天様も氣取つた姿を現はす機會がほとんどない様である。勿論、七福神も神様に依つては、獨立して鎮座さるゝ時は謹嚴犯し難く、神威赫々たるものがあるのであるが、御一緒に集りになるとつい浮れて御行儀も良からず、専ら「笑ふ門に福來る」ことを實踐され、此を拜する我々も亦出方が氣樂な感じがするので正月は専ら七福神の寶來を迎へるかの様である。

神、辨天と毘沙門は印度神、他の三人は中國人である。國は天竺震旦日本と三國にまたがり、宗教は佛教・神道・印度教・道教の四教をかねて居るのであるから、極めて盛觀で莊嚴な結集である筈であるが、何かしら福神的奇人コンクールのな感じすら生じて、寔に神威感のうすい、諸譴性の先立つ神

夷と大黒

夷は惠比須とも書き又蛭子とも書くが、御本據は攝津國西宮神社で、此處を一般に夷宮（えびすのみや）と言つて居る。夷様は本名が夷三郎殿であるが、狂言「惠比須大黒」に出て来る惠比須三郎殿の告白に依ると

「夫れ伊邪那岐・伊邪那美の尊、天岩倉の苔筵にて男女のかたらひをなし給ひ、日神・月神・素戔鳴尊をまうけ給ふ。天照大神（日神）より三番目の弟なればとて、西宮の惠美須三郎殿といはれたり。信仰せよ、信仰せよ、樂しうなして取らせうぞ」

とある。此は岐美二神の第三子に蛭子が生れて三才になつたが、なほ足立しなかつたので（恐らくは軟骨兒であつたので）、二神相談して天石櫓舟に乗せて海へ流したが、此が海を司る神となつて、攝津西宮神社の祭神夷三郎となつたと言ふ傳説に依つたものである。

西宮の夷様は毎月十日に商賈繁昌をお祈りする神様であるが、此宮は昔大國西宮神社と言つて、大國主命を夷殿として祀り、同時に其子事代主命をも二郎殿として併せ祀つたと言はれて居るし、今でも神社では大國主命が祭神であると言て居る。

然し、拜む一般民は初めは夷殿三郎殿なる二桂の神と申し上げて居たが、やがて其れが夷三郎殿と變り、夷三郎殿が略されて夷殿となつて、最初とは反對に事代主命が夷殿となつてしまひ、更に、此に天照大神の弟の蛭子（ひるこ）を「えびす」と讀み違えて結びつけ、上述した狂言に出現する惠比須様がお産れになつたのである。

故に夷様の系圖は學者が調べると種々あると思ふが、私共に今拜まれて居る夷様は大國主命と事代主の命と蛭子との三神の神力を一神に見立てた神様である。

事代主命は釣が好きで、天孫降臨の時に三穗之崎で釣をして御出になり、後に退いて海の守りとなり給ふたし、蛭子も海を司る神となつたのであつて、夷様は海に縁のある神である。海神は航海を守り給ひ、港の市を榮えさせ給ひ、やがては商賈を繁盛させ給ふのである。大國主命は日本の地主神であるから生産を助ける神であり此の神力も夷様の神力中の一分になつて居る様である。昔西宮の夷宮に宮中の奥向きの女房達の宿願がかけられたこと一回ならずあつたと言はれるのは、男子の出生を祈つたものと思はれる。

惠比須に配するに大黒は、神様の社會ではほとんど無縁の様であるが、信仰する側は離すことの出来ない一對である。上述の狂言「惠比須大黒」に出る大黒様の告白に依ると

「傳教大師、斯程の山（比叡山）に守護神無くては叶ふまじとして一日に三千人を守り給ふ天部（神）をと祈誓し給ふ所に、此大黒出現す。開山、「いゝや、大黒は日に千人こそ扶持し給へ、此山には三千の衆徒あれば、大黒天はいかゞある」とある、其時、大黒天大きに怒て、『いでさらば、三千人を守る奇特を見せん』とて、忽ち三面六臂と現はれければ、開山喜悅の思をなし、夫より比叡山無動寺の三面の大黒と言はれ、今に佛法繁昌に守るなり。心易ふ信仰せよ、樂しうなしてとらせうぞ」云云。

大黒様は印度で摩訶（大）歌羅（黒）天と申し、初めは惡神をこらす

猛神であつたが、その次には食厨の神様になり給ひ、主として御寺の臺所に鎮座して一日千人の食物を授與し給ふことになつた。此の食物を授ける神になつた大黒天を傳教大師が日本に迎へ、比叡山延暦寺の臺所の主神となし給ふた時の話が、此狂言となつて居るのである。

南海寄歸傳と言ふ印度の様子を書いた書物に依ると、大黒様が臺所に鎮座する時は、金袋を持ち、小牀に踞り、片足を地に垂れて居り、此の像を拜する者が油で毎日拭ひ上げる爲に黒光りして居ると言はれる。然し日本へ御出になつた時には、小牀に踞る代りに白に腰かけて御出になつた様である。そして日本へ御出になつてしばらくすると、日本にも大國主命と言つて、大國と大黒とが普通する神が御出になつたので、早速に日本印度合體を敢行され、新しい大黒神が出現されることとなり、米俵に寶の袋をかつき打出の小槌を持つた姿となられたのである。そして此の大黒は御寺の臺所から街頭進出をなされて、夷と相並ぶこととなり、その昔、西宮で夷殿三郎殿と言つたのが、今度は夷三郎殿と大黒の取合せになつて、狂言にも進出され七福神の選舉にも當選されたのである。狂言に依ると惠比須即ち夷様の釣竿にある釣針は、金銀珠玉のほしいものは何でも心のまゝに釣取ることが出来る由であるが、大黒様の袋には一大三千大千世界の寶が入れてあるし、打出の小槌は思ひのまゝに寶を打出することが出来るとされる。

誰が作つたか判らぬが佛說摩訶迦羅大黒天神大福德圓滿陀羅尼經と言ふ御經がある。此經に依ると大黒様を拜むには「唵摩訶賀羅耶

莎賀」(オンマカギヤソワカ)と唱えるので、此を唱えると天からは大摩尼寶が降て來るし、地から無量の財寶が涌き出ると書いてある。東京の方は小石川の大黒様へでも御參りになつて、此を唱えて頂き國富を増進して頂きたいものである。(つゞく)

(九頁よりつゞく)

お母さんの「愛」があるからと云うて、お父さんの「愛」が要らぬのでない。姿には紅白、強弱、和戰、色々あるが本質は常に一なる「愛」です。天地の實相は、此の一に基き一より出て一へ還へる差別のまゝの調和相です。此の「大和合相」の一環として自分を生かして居れば、どんな場合にも自分は正しいのです。又、どんなに不幸に見えても自分には不幸と思はぬ。又世間的にはどんなに不正に見え、罪惡に見えて「十字架」に掛けられ「拘首臺」に立たされようと、却つて我れを紂する者をして反省せしめ、斷然、世を淨め、人を革めしめる覺者であります。正しき信念からなる生活——ほど清く、崇く、自由なる生活はありませぬ。そして常に又永遠に自他一切を自覺せしめつゝあるものです。コレを「宗教」と云う。宗教だからと云うて特に宗教家と云う特種的な生活人にならねばならぬ事はない。夫々の形と夫々の行き方で以て、最善最高の宗教生活を不斷に創作せなくてはならぬ。

現代妙好人傳 ただ申す念佛生活

阿 川 貫 達

私は昨秋十月初旬仙臺での宗學大會に、宮城縣涌谷町光明院住職奥清暉師に數年ぶりにお目にかゝり種々お世話になつた節、その師父武田眞隆上人の平常の行狀臨終の御様子等を承り、まことに尊い事に存じその原稿を御願ひした所、左記の如く寄稿されたので掲載していただく事にしました。

武田上人と奥君は師弟の關係で十五才より愛育され本年三月光明院に住職されたと云う。仙臺でのお話及び今回の御手紙では武田上人の密葬本葬共に空前の盛儀で檀徒の殆ど全部、有名無名の多數の歸依者の參列を得、殊に密葬の際には病氣見舞に不參の方々數百名が是非御顔を拜ませてとの懇望に、茶毘に附する前まで棺の蓋を開き「生ける御佛」「觀音菩薩」さながらの相好をふしおがみ、その莊嚴さに打たれて何れも涙にむせび高聲念佛止まなかつたと云う事である。

又武田師寂後その多年の念願であつた本堂等の屋根二百三十坪の葺替を、檀徒總代世話人等の御盡力により、同師への報恩として百萬圓を投じて本葬終了後直ちに着手、七月末銅板葺替完了したと云う。其等は何れも武田上人の德行念佛の然らしめた所でさり餘徳の

顯れに外ならない。

養育された弟子十數名、まことに近來の善知識であられた。依つて次に奥清暉師の玉稿を掲げていただく。

師父武田眞隆師は、明治九年二月廿一日岩手縣江刺郡岩谷堂町に生れ、幼名を三郎と呼び、幼にして同町松岩寺に入り、同十六年四月盛岡市川原町圓光寺前住職亡藤隨觀師の許に於て得度致し、僧名を眞隆と申しました。同卅年七月檀林傳通院勸息義城上人に就て宗戒を相承し、同三十三年六月宗學高等科二年を修了し（現在の大正大學）同卅三年十月松岩寺住職、大正五年七月盛岡市川原町圓光寺住職として、臨終迄の五十年間淨土宗の一僧侶として、只、ひたすらに念佛門に活き、正念往生を期して、七十五年の生涯を念佛に全ふ致しました。

祖師法然上人が「十惡の法然」「煩惱具足の法然」「一文不知の愚鈍の身」と自己を全く空しくも、へりくだり、智者のふるまひをせずして、ただ一向に念佛する事に全生涯を全う致しました様に、師父も亦、身は罪惡の凡夫なりとして、「念々稱名常懺悔」し、平常日課

念佛に精進し、日に百數十體の觀音像の御姿を描き、數百枚の南無阿彌陀佛の名號を書き、特に、中日事變以來護國の華と散つた忠靈を慰むべきは勿論の事、廣く萬國の英靈を慰むべく、或はまた不慮の災難にて河川、若くは大海に其の生命を失つた方々の御供養に、夜分ひそかに寺族交替で人の眼にふれぬ様に、よどみなく流れゆく北上川に、觀音像、名號を施餓鬼供養して、雨の日も、風の夜も、雪の夜も年中毎夜幾百萬の精靈を御慰めして居りました。

昭和十三年秋、大本山増上寺法主大島徹水大增正大導師の下に、第二師團(仙臺)四聯隊田代部隊の慰靈祭の節、恙なく式を終了し、其の餘力を以て大島法主導師の下に、松島灣頭にて觀音像一萬枚を流し大施餓鬼會を催した事は、その當時僧俗を問はず多くの人々に甚大の感銘を與へたのであります。

晩年の數年間、師父が最も生甲斐を感じたのは、来る日も来る日も終日、觀音像、南無阿彌陀佛の名號を書く事と、筆を置いたときは絶えず日課念佛を稱へ一萬、乃至二萬、多い日は三萬四萬と念佛を唱へて、佛様への御供養を怠らずつとめた事で、そして部厚な日記に記入して居りました。日記の一二を抜萃致します。

十月廿六日 快晴

大士(觀音像)

一三五

名號

三〇〇

念佛

一五〇〇〇

十月廿七日 晴

大士

二二〇

名號

一〇〇

念佛

七〇〇〇

觀音の尊像が良く描かれたときは押へ難い喜びを滿面に表はし、恰も、無心の嬰兒の笑めるが如くであつた事が思ひ出されます。常に念佛にたゆまざる精進を重ね歡喜し、其の七十有五年の生涯を、たと一途に念佛一行に終始されました事は、誠に尊くもあり、驚嘆の外はなく、有難度い事でした。毎月の定例說法にも、法然上人御法語のただ申せ申すばかりをつとめて

淨土の莊嚴みるぞうれしき

と說法の終りには必ず繰り返し繰り返し申して居られました事を思ふとき、遠く祖師達や先輩が理論上、信仰上、體驗上、あらゆる面から説き明かされ現はされた道を、念佛の二字に決定して努力して來られた事は言ふまでもない事です。が洵に感悦極りない忝い事だと存じます。

或る日、煩惱につきお尋ね致しましたとき、師父曰く、「常に念佛を唱へて、其の起る煩惱を打ち消し、漸次其の煩惱が念佛の中に包まれて終ふ様に、絶へず、念佛して、自分の生活が念佛の中での生活であつて、生活しながらの念佛であつてはいけない」といふ事を云はれましたときは、痛く感激し、獨り會心の喜びを禁じ得なかつたのであります。

其の念佛に明け暮れてゐる師父が、年の瀬も押しせまつた二十四年十二月下旬風邪を召されましたが、床にも臥伏せず重態となる二十五年一月十七日の前日迄、檀務は勿論の事相變らず、例の日課を續

けて居りました。主治醫工藤老醫師よりは急性肺炎の診断を受け、十七日初めて絶對安靜を保ち病臥する事になりました。看護婦二人先生の御内諾を得て醫師二人御願ひ致し萬全を盡しました。その先生方の非常な御盡力により大變病勢良く、寺務上の事は毎日欠かさず聞き、指示して居りました。併し、萬一の事を慮り、遠近の血縁者、知人に打電し皆様が御見舞に來られますと、かへつて見舞の方が慰められ其の勞をねぎらはれて、大變元氣に物語などせられ一同愁眉を開きました。

併し一月廿五日午後八時半頃突然病狀激し非常な苦しみで、先生より危篤狀態が宣告されたので、總代、知人に急報し、萬全を盡して居りましたが、食欲殆どなく老體の事ではあり、ペニシリン、リッゲル、ブドウトウ、強心劑、ビタミン劑、あらゆる注射のみが唯一の力でありました。衰弱は漸く濃く唇を動かしても聞きとれぬ程でしたが、その動き方で念佛を唱へて居る事はうなづかれました。そこで、「お手傳ひしてあげます」と言つて枕頭の皆さんにも御手傳ひいただき、下音で念佛を唱へ懸命に彌陀に正念往生を御願ひ致しました。其の内呼吸困難に陥りました所、いたはしいかな瘦衰へし腕を伸ばし、薔爾として合掌し、斜上方を視つめ、唇をビクビク動かして居りました。丁度其の時彼の國より阿彌陀佛が寶車を隨えて御來迎し給ふた事と存じます。並居る數十名の人々皆感激し念佛の聲一層高く御手傳へしてあげた事です。暫くすると息づかひも良くなり其の面貌が實に平和な、安らかな、圓滿な、光顔巍巍の容貌を帯び、其のまゝ明るる日を迎へました。も早時間の問題となり日頃

御慕ひ下さる知人、御世話戴いて居ります檀信徒の方々に臨終の近きを急報しました。驚き悲しみの中に皆様が早朝より御別れに來寺下され命終の日迄見舞の方々が絶えず。其の各々に半眼に開き挨拶して居りました。かくて廿八日面貌全く圓滿な、柔和な様相で恰も嬰子の眠るが如く、純眞無垢、其處には何等の穢濁もなく、邪惡もなく、げに、拔苦與樂し給ふ大慈大悲の彌陀の如き容相をたゞえて、寺族一同、血縁者、總代世話人、知人六十有余名の靜かに稱える念佛唱和の裡に「心顛倒せず、心錯亂せず、身心に諸の諸の苦痛なく、身心快樂にして禪定に入るが如く」眞に大石の深き水底に音もなく動ずる事なく、靜かに靜かに沈みゆく如く、從容として多難な七十五年の一生涯を、常に念じ、常に願望した、なつかしい彼岸への正念往生となりました。

此の時の情景誠に感悅極りないものでありました。數多の人寂として聲なく、崇高なる其の御姿、光々しき面貌は、觀音の化身かとも見え、一同只感泣嗚咽するのみでした。老練な工藤醫師も信仰の偉大さをつくづく感嘆して居られた。時に一月廿八日午後一時十五分師父晩年の作二三を列記致します

○生きんともまた生きまじとも思わねば

心にかゝる年の瀬もなし。(昭、二三、七)

○日没の西の彼方に手を合せ

南無阿彌陀佛阿彌陀佛(昭、二四、十二)

○年の暮れ今年も暮れぬ今年はと

思ひし事もいたづらにして(昭、二四、十二)

法名 正蓮社贈正僧正法譽上人興阿慧眼眞隆和尚

會友の聲

◇東北から關東の巡講を終つて歸坊し、淨土の十月號をうれしく拜見しました、とりわけ江上僧正の御健在を知り、御同慶にたえません。東北ではキリスト教・禪・日蓮宗などの方たちと童話を通じて、あたゝかい心の交流をしてみいました。私たちが宗派を問わずこうした同じ宗教家であるということ、手を握りあうことが出来るのです。淨土宗——あの圓滿な宗祖法然上人の流れを汲む末徒が心から團結できないとしたら之は情ないことだと思ひます。信仰相談のページ再開されたし。

(大阪・こどもの寺・森正義)

◇去年・眞野先生の法話をラヂオにて拜聴いたし、淨土の教にふれさせていただきましてから、早くも一年余りの月日が流れました。私は病中ながら、一日一日を感謝による彌陀念佛行人知れぬ喜びをもつて、朝の目ざめに夕べの眠りに、床の中からですが、常住念佛の教えに従つて生活をつゞけております。これみな、先生のお蔭とひたすらに今後とも病床にあつても念佛行に生きつゞけてまいります。(東京・茂木 仁)

◇貴會の皆さまには護法のため、いよいよ御精進のことこの上なき喜びです。中外日報などみますと他の宗派などの雑誌出版物は相當多いように見受けるのに比べて、専修念佛のわが淨土宗の出版物の微々たるを感じ、本當に淋しい思ひでしたが、貴會から「淨土」が月刊されていることを知り、まことに心強く早速おたよりする次第です。(山口・本多勝朗)

芝園だより

◇一九五一年おめでとう。

いよいよ廿世紀後半期の第一歩が始まります。「君が代」をうたい、日の丸を立て、「年の始」を祝うこの新しい一步に、今年こそわが國にとつて、世紀のよき年としたいものです。「君が代」復活をめぐつていろいろ論議があります。しかし私たちは一部の人たちが言うほど、コチコチの氣持で歌つてきたのでせうか。子供の頃に私たちは、はるかに楽しくおほらかに歌つてきました。この心で今年は歩いて行きます。

◇戦後の新しい傾向も、善惡親疎を論ぜず、ひとつこゝらでじっくり考え直してゆきませう。先づ若い人たちが示した姿の中でスバライのは行動力でした。たしかに生活の實行力こそ、唯一の頼りとも思える社會がそこには續きました。しかし、こゝでひとつ省みる必要があります。行動力の背後に

その根底に、智的な、そして情操的な教養が欠けていました。今年こそ、この生活の慧知と愛情をまづ恢復したい。(藤田)

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申し上げます。

「淨土」 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿五年十二月廿五日印刷
昭和廿六年一月一日發行

(定價貳拾圓)

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇

振替 東京八二一八七番
會費番號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓(送料共)

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十五年十二月廿五日印刷 昭和二十五年一月一日發行

第十七卷 第一號

定價 金貳拾圓(送料別)